

せる程度となり、やがて涸れてしまう。所々にある灌木につかまりながら岩場の上を登るが、意外に足場はよく、水が涸れてから 15 分ほどで稜線に出る。天気が良く、見晴らしがきいて大満足である。代官袋沢が突き上げている東岐山の姿が特に印象深かった。(記・

[タイム] 橋(7:30)→清作沢出合(8:10)→最後の二俣(10:45)→稜線(10:55)

### 蒲生川支流無名沢 1996年7月28日

I

小白沢の遡行後稜線で十分に景色を堪能した後、バリカンで刈ったようにブッシュが一筋はぎ取られ、岩肌がむき出しになっている所を下降する。傾斜が急すぎてツルツルなので、靴のフリクションだけでは体を支えられず、脇のブッシュにつかまりながら下る。佐藤さんはワラジのフリクションがきくのか、下降がうまいのか、アツというまに下って行ってしまった。

20 分くらいで 170 m ほど下って、最初の小沢に出合う。ここからは傾斜も緩くなり、滝らしい滝も出てこないまま林道に出る。

林道を 1 時間ほど歩いた所で大西君の車にひろってもらい、キャンプ地に戻る。

(記・

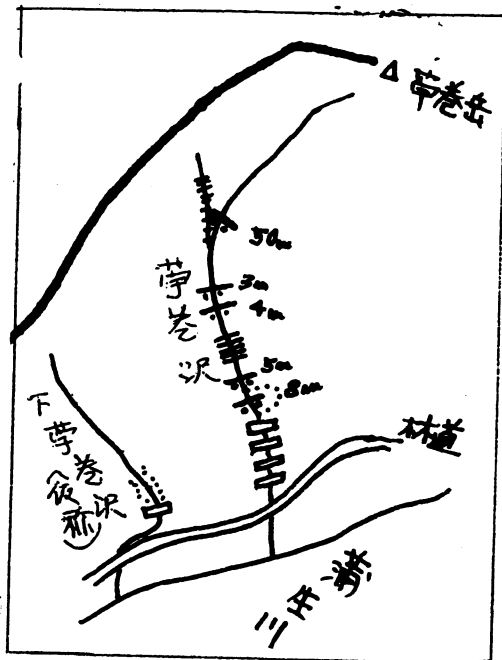
[タイム] 稜線(11:05)→最初の沢(11:20)→林道(11:45)

### 蒲生川支流苧卷沢 1996年7月28日

L

昨年間違って入ることができなかつた苧卷沢へ、今度は間違いなく入谷。林道より直接入ることになるが、出合はコンクリートの流路、周辺はヤブで、最初からアルバイトとなる。

ほどなく治山ダム。右岸を乗り越えて先に進むとるまたしても治山ダム。今度



は左岸を乗り越えて進む。この先にも2基の朽ち果てた玉石のダムがあるが、こ

れは簡単に乗り越えることができた。

しばらくして8mの滝。ハングで落ちており、直登は不可能。左岸を捲く。

遡行を開始して2時間。行程の半分くらい来た所で、まわりが急に明るくなると、前方に突然の滝。高さは不明。見える範囲では軽く50m以上、同じ傾斜で稜線まで続いている。周辺は雪崩の影響か、立木は全くない草付。滝を強引に直登すれば登れそうであるが、下降の支点となる立木はなく、思案の

あげく遡行終了として、今きたところを戻ることとする。 (記・

[タイム] 林道(7:15)→遡行終了(9:20)

### 蒲生川支流下苧巻沢 (仮称) 1995年7月30日

L

林道を走っていると、どの沢も水流が細い。水田に水を引くための用水路の元をたどると沢があり、これを苧巻沢と思い込んでしまった。結果的には苧巻沢の1本下流の沢であった。

すぐさま治山ダム。これを乗り越えて進むと、今度はゴーロ帯。これを過ぎるとスラブ帯である。地図で確認すると、苧巻沢の1本下流の沢だとわかったが、もう後の祭である。結局稜線めざして進むことにする。

上部はスラブで、どうにも手のつけようがない。やむなく尾根に逃げて稜線に立つ。稜線でしばらく休み、ザイルを使って八木沢への下降に移る。

(記・

[タイム] 林道(7:20)→稜線(9:00)